

逗子より

泉鏡花作

明治三十九年八月

拜啓、愚弟におんことづけの儀儀承り候。來月分  
新小説に、凡兆が、（涼しさや朝草門に荷ひ込む）  
趣の、やさしき御催しこれあり、小生にも一鎌仕れ  
とのおほせ、ゐなかずまひのわれらにはふさはしき  
御中しつけ、心得申して候。

まづ、何處をさして申上げ候べき。われら此の森  
の伏屋、小川の蘆、海は申すまでも候はず、岩端、  
松蔭、朝顔、夕顔、螢、六代御前の塚は凄く涼しく、  
玄武寺の龍膽は幽に涼しく、南瓜の露はをかしげに  
涼しく、魚屋が盤臺の鱸は・・・實は餘りお安  
値からず涼しく、ものにつけ涼しからぬはこれなく  
候。わけて此の頃や、山々のみどりの中に、白百合  
の俤こそなつかしく涼しく候へ。

なかにも、尊く身にしみて膚寒きまで心涼しく候

は、當田越村久野谷なる、岩殿寺のあたりに候土地  
の人はたゞ岩殿と申して、石段高く青葉によづる山  
の上に、觀世音の御堂こそあり候。

停車場より、路を葉山の方にせず、鎌倉の新道、  
鶴ヶ岡までトンネルを二つ越して、一里八町と申し  
候方に、あひむかひ候へば、左に小坪の岩の根、白  
波の寄する境に、青田と淺緑の海とをながめ、右  
にえぞ菊、孔雀草、浦島草、おいらん草の濃き紅、  
おしろい草、装を凝したる十七八の農家つゞきに、  
小さく停車場の全幅を望みつゝ、やがて、踏切を越  
して、道のほど二町ばかり参り候へば、水田の畔に  
建札して、坂東三十三番の内、第二番の靈場とござ  
候。

早や遠音ながら、聲冴えて、笥に響く夏鶯の、山  
の其方を見候へば、雲うつくしき葉がくれに、御堂  
の屋根の拝まれ候。

鎌倉街道よりはわきへそれ、通りすがりの打見  
は、檀原の山の端にかくれ、人通りしげき葉山の路  
とは、方位異なり、多くの人はい此の景勝の靈地を知

らず、小生も久しく不心得にて過ぎ申

尤も、海に参り候、新宿なる小松原の中よりも、  
遠見に其の屋根は見え候を、後に心づき候へども、  
旗も鳥居もあるにこそ、小やかなる茅屋とて、たゞ  
山の上の一軒家とのみ、あだに見過ごされ申すべく、  
況して海水帽あひ望み、白脛、紅織るが如くに候を  
や、道心御承知の如き小生すら、時々富士の雪の頂  
さへ眞正面に見落して、浴衣に眼を奪はれ候。

東鑑の十三に、委しき縁起候とよ。いにしへは七  
堂伽藍、雲に聳え候が、今は唯麓の小家二三のみ。

當春、はじめて詣で候折は、石段も土にうづもれ  
て、苔に躓くばかりあゆみなやみ候が、志すものあ  
りて、近頃は見事に修復出来申候。

麓の里道、其石段まで、爪さきあがりの二町ばか  
りがほど、背戸の花、屋根の草相交り、茄子の夕日、  
胡瓜の風、清き流颯と走りて、處々の隈に、柄長き  
柄杓を添へたるも、なか／＼の風情に候。此處を螢  
の名所と申すを、露草の裏すくばかり、目のあたり

にうかべながら、未だ怠りて参り見ず。

夜は然こそと存じ候。

折りからと申し、御言をつたへながら遊びに参り候愚弟をともしなひ、盆前の借罪消滅のため、一寸参詣いたし候。石段は三階の、就中ニツ目の高く嶮しきには、何某と何某と、施主ありて手曳の針鐵ひきわたしこれあり、縋るとて、扇子の竹觸れて、りん／＼と鈴蟲の微妙なるしらべ聞え候。

あはれ、妙音海潮音の海の色もこゝに澄み、ふりあふぐ山懐に、一叢しげれるみどりの草の、螢の光も宿すべく、濡色見えて暗きなかに、山の端分くる月かとはかり、大輪の百合唯一つ眞白きが、はつと揺ぎて薫りしは、此の寂さに拍手の、峰にや響き候ひけん。

御堂の院の扉をすく、御佛もよそならず。雲か、あらず。煙か、あらず。美しき緑と紅と黄と白と紫と、五色の絹糸、朱塗の柱に堆き、天井の繪の花の中を、細くたなびき候は、御手の糸と稱ふるよし、

御像みすがたの御袖おんそでにかけまくも綾あやにかしこく候なほひき。

具一切功德ぐいっさいくどく

慈眼視衆生じがんししうじやう

福壽海無量ふくじゆかいむりやう

是故應頂禮ぜこおうちやうぢやうらい

かくて、霧きりたたば、月つきさゝば、とおのづから衣紋えもん  
の直なほされ候なほ。

時に松吹まつぶく風かぜばかり、方丈ほうじやうに人もあらず。狭筵さむしろ

の片隅かたすみに、梅花ばいくわしんえき心易しんえきのさし置おかれ候なほを、愚弟ぐていのそゞ  
る手てに取りとりて、開ひらき見みんといたし候なほまゝ、よしなく  
的あてのない美人びじんの名なを占うらはんより、裏うらの山やまへ行いつて  
百合ゆりを折をらうと、夏草なつくさをわけ、香かをたづねて、時ときの  
間まに十本とまとばかり、枝えだもたわゝなるをゆら／＼と引ひか  
つぎし、此この風采ふうさい、其その顔色がんしよく、御存ごぞんじの方々かた／＼嘸さぞ苦々にが／＼  
しく候なほべく、知しらぬ人ひとには異あ異なるなほべく候なほ。

さきにはむすびて手てを洗あらひし、青薄茂あをすゝきしげが中なかの、山やま  
の井いの水みづを汲くみて、釣瓶つるべを百合ゆりの葉はにそゝぎ、これ

せめてものぬれ事師。

山の井に棹さす百合の雫かな

やがて下山いたし候へば、麓の流に棲むものゝ、  
露も水も珍しからぬを、花の雫をなつかしむや、澤  
蟹さら／＼と蘆を分けて、三つ四つならず道ばたに  
出迎へ候。愚弟は萩の細杖に、其の百合の花持添へ  
て、風情なる哉、さゝがにのと、狩衣めかし候を、  
此方はさすがに年上なれば、蟹的め、ならぶるなど、  
藁草履踏みしだいて、叱々とゆふぐれ時、イヤ我な  
がら馬士めいたり。

瑩にはまだ暮れ果てず、立歸り候が、いかに逗子  
の風の、そよとも御あたりにかよひ候はゞ、お晝寐  
におつかひ下され度候。